3．与謝野町鞭家文書調査

上武　恒介

1．概要

鞭家文書は京都府与謝野町の鞭家に伝来し、京都府立丹後郷土資料館に寄託された文書群である。同館杉田真菜学芸員の相談を受けて本学教員東昇が資料を借用した。2024 年 9 月に小松家文書とともに京都府立大学文学部歴史学科文化情報学研究室に搬入され、現在は目録作成を進めている。本調査は、京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）「京都府北部の MALUI・高大連携による文化資源を活かした地域づくり」（研究代表：東昇）の一環でおこなわれた。

調査日程　　2024 年 11 月 2 日ほか

調査参加者　東昇（教員）、趙金実、渡邊幸奈（以上博士前期課程）、上武恒介、山崎敬幸（以上 2 回生）ほか

2．内容

鞭家文書は中性紙箱 6 箱と段ボール箱 1 箱に収められた状態で搬入され、およそ 500 点におよぶ文書群である。明治・大正期の文書が大半を占め、このほか絵画もある。

鞭家は与謝野郡石川村（現与謝野町）に居を構えた家であり、19 世紀初頭に建てられた住居が現存する。特に明治期以降、分家の神鞭家からは衆議院議員の神鞭知常を輩出するなど地方名望家として活動していたことが知られるが（安井達弥「神鞭知常」『国史大辞典』ジャパンナレッジ版）、本文書群の伝来した鞭家との関連性については不明な点が多い。

文書群の内容は①家政・家業関係、②個人的な金銭貸借・書簡、③書画・漢詩文に大別できる。村の行政運営に関わる史料は少ないが、「六微旨大論篇第六十八」（文書番号 1-92）などの医学関係の史料や書画・漢詩文が多い点が特徴といえる。特に近世後期の当主である 66 世鞭政周（俗名求馬）は漢方医として活躍していたことがわかり、地域社会における名望家の医療供給という側面を考える上でも重要である。

鞭家の由緒については明治期の作成と考えられる「御願口上之覚」（1-86）に詳しい。万治 3 年（1660）に至るまで約 1300 年間の血統の相続や、用明天皇第 3 子麻呂子親王による悪鬼退治に奉仕した功を受けて鞭姓を賜ったと記されている。また、丹後国加佐郡漆原、由良庄瀧之内、石川庄山田、近江国坂田郷を知行所として、帯刀の特権を得ていたとされる。類似した内容の史料は複数あり（1-98・99）、その作成背景や関連性の解明は今後の課題である。

引き続き文書群の全体像把握のため、目録作成、ラベル貼り、撮影を進めていく。

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。（い）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第11号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2025年3月31日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2